

周作人独自の散文形式について

A Study of the Quintessential Prosing Style of Zhou Zuo Ren

湯 麗 敏
TANG Liming

1. はじめに

「五四」新文化時期は 20 世紀中国文学の最盛期であった。中国文学が文語文より口語文への転換し、現代文学の観念が伝統の文学観念を取って変わる中、大勢の新文学の巨匠が機運に応じて生まれた。彼らは当時の文壇に新風を吹き込み、多くの新しいスタイルの作品を発表したが、中でも最も目立ったのが散文という類の作品であった。

散文というと、一般的にはまず散文の父といわれた魯迅のことが挙げられるが、その弟である周作人の功績も大きかったということは意外に知られていない。それまで、中国の文学作品というと、難解な言い回しの多い古語或いは文語体であることが普通であったが、周作人は中国では一番早く散文という文章のスタイルを提唱した作家である。

実は、周作人は 1921 年「晨报副刊」^①に発表した「美文」という作品によって中国の現代散文理論史上の元祖として、広く認識されるようになった。「美文」は、たった五百あまりの文字数の短文だったが、その文章が発表された意義がきわめて大きかった。彼は、論文の中の幾つかのタイプを文学のカテゴリーに組み入れ、そして、それらを芸術性がある「美文」を称し、また一般的な議論論文と違って、「詩」という特質を持っていることも指摘した。

『美文』^②の中にこう書いてある。

「外国の文学のなかでは、「論文」は二つのカテゴリーに大別される。一つは、批評であり、学術的な論文であり、もう一つは、記述であり、芸術的な論文がそれに当たり、後者を指して「美文」と称する。その中でも、叙事文と抒情文にまた分けることができる。しかし、両者混在のスタイルをとる作品も多く見られる。」

「美文」の発表により、現代散文が当時の人々により明確な形で認識されるようになった。或いは、この作品の発表そのものが、当時文壇における一つのマイルストーンと言えるかもしれない。

ところが、周作人によって書かれた散文は、会話形式をとっており、読解が容易であり、内容も一見平淡であったが、実は奥深い含意の多い作品が多かった。散文の内容は、時には愚かに見えるが、実際は滑稽である。このような作品が成功することによって、「美文」を書くには、口語を使ってはいけないという中国の伝統的な考え方——ある種の迷信を徹底的に打破することができるようになった。

周作人の散文は 1930 年代以前とその以後では異なったスタイルを見せる。彼の芸術風格と成果も散文の創作に十分現れつつある。だから、周作人は現代散文の分野で、尽くした貢献が主にこの時期にあると考えられる。出版された数多くの散文集は次の通りだ。

『自己の園地』(1923 年)、『雨天の書』(1925 年)、『沢瀉集』(1927 年)、『談虎集』(1927 年)、『談龍集』

(1927年)、『永日集』(1929年)など。

率直でありながら勢いが激しい時事を談論する作品もあれば、テクニックに拘らないシンプルな読書随筆もある。また周作人が自称した「美文」といわれる芸術性に富む散文もあった。しかも、もっとも周作人の散文の個性と芸術風格を代表ができるのは、まさに周作人のその「美文」であった。

周作人にとっては、散文とは、完全に個人の気立てが沁み込んだ濃厚な味わいを持たなければならなかった。主体性というか自我への尊重と表現、現代文化人の主体精神と自由への渴望を強調したいという願いの現われなのである。

2. 周作人散文の創作理論

周作人は、中国の現代散文史上には、大きな影響をもたらした作家であり、理論家でもあった。そして、現代散文の主要な提唱者であり、またこの新しい文体特徴の最初の解釈者でもあった。

一時、外国の文芸文学作品及び思想が急激に中国に流れ込んできたため、多くの作家が外国の文学創作を模倣する傾向が見られたが、しかし、周作人はしっかりとした民族的な思考方式、民族の審美観と自分の趣味に基づいて中国の現代散文の発展方向と道を探求した。

彼は、まず理論上で、「郷土文芸」を極力提唱した。そして冷静と優れた知性により、「個性と民族性、民族性と国粹」との関係性を弁証的に分析し、民族化文学の発展を唱導した。そして、「外国の模範文を見て、模倣してはいけない。自分の文句と思想を用いて、作品を創作しなければならない」と指摘した。^③

周作人は、独立した新しいスタイルの文学を作るために、伝統的、正統な文学と対等に立ち振る舞い、そして、いわゆる「文芸統一論」を強く批判しながら、今までのヒューマニズム、個人の感情を軽視した言論と戦った。「個人」と「人類」の関係性を分析することによって、新しい散文の「個人化」を堅持し続けてきた。

周作人は『自己の園地・文芸の統一』にこう書いている。

「文学は情緒の作品であり、作者がもっとも切実に感じられたものは自分の情緒なので、文学は個人・本人を本位にするのが当然のことだ。個人は人類の一分子である以上、個人の生活は、すなわち人生という河の流れの中の一滴である。個人の感情は、当然人類と違うところはない。けれども現在の多数決のことをもっとも神聖だと視する時代では、個人の意見ないし苦しみや楽しみをどうでもいいと見られるのが習慣になった。これらの影響力が大変強いけれども、実はそのような筋道は存在しない。」

彼は、一人の苦しみや楽しみが千人の苦しみや楽しみとの違いは、ただ数字上の違いだけで、質の違いではない。だから文学作品は、千人の苦しみや楽しみを書くことができれば、一人の苦しみや楽しみを書いていけないはずはない。何を書くかについては、すべて作者の自由だ。一般論で言えば、感情というものは、数という問題ではない、個人が感じられた楽しみや苦しみが純真でさえあれば、切実でさえあれば、普遍的な感情にもなるのではないかと考えたのである。

周作人は散文創作に対して、社会全体での意義の標準を以って、文学を統一してはいけないと思い、それ自体が不可能であるということ指摘し、文芸は人生のものであり、人生のためのものではない、個人のものであるから、すなわち人類のものでもあると、一貫として強調したのだ。彼が著名な「美文」という文章の中で主張したのは、ただ散文という新しいスタイルの文章だけでなく、また「美文」を芸術的な文学作品として見なければならぬことを指摘し、仲間たちに分かりやすい叙事と叙情を主とする「美文」を書こうと呼びかけた。その後、中国では口語体の散文がたちまち流行りだした。

周作人はたくさんの文章の中で現代散文の文体特徴、歴史淵源、発展方向についての持論を展開している。1930年代の半ばに出版された『中国新文学大系・散文一集』「序言」をもって、個性化、芸術化、民族化を特

徴とした中国現代散文理論体系の完成を見ることができ、「五・四」時代の「自我発見、個性を強調」の道に沿って見れば、散文の個性化は周作人の現代散文の理論に基づいたものであることがわかる。周作人が思うには、中国現代散文は、個性化文学の最高の造詣になるべきものであり、散文の基本特徴は個人の情感を述べることでなくてはならない。

「散文の美しさは、博引傍証をして物語をどれだけ書くことができるか、優雅で綺麗な語句をどれだけ使うかというもので評価されるものではない。肝心なのは、心中の思い、感情をいかに率直に表せることができるかの一点にある。それこそがいわゆる散文の美しさだ」^④と李素伯が周作人の散文の美しさを評価している。

散文の最高の境界となるのが、身近な事実のことを分かりやすく自然に表現ができること、そしてそれを読者に読んでもらいたい、心で悟ってもらいたいということが、まさに周作人が求めていた散文の創作目的だと考えられる。

「わたしは最近作品を書くとき、平淡自然の境涯をきわめて羨むことになる。しかし古代あるいは外国文学の中にだけ、このような平淡自然の作品がある。自分ではできる日が来るのを夢にも思わなかった。なぜかという、それは気質、境涯と年齢との関係があるからだ、無理強いをしてはいけない」と周作人は語っている。(『雨天の書・序二』)

周氏の散文が数多くの読者に親しまれ、愛読される原因は、ほかでもなく、一つは事実を事実として書くことがまさに読者の要望に叶っていたことであり、もう一つは、作品から伝わる伝統文化の息吹がまた一般庶民の普遍的な鑑賞心理にも合致したゆえだと考えられる。要するに「簡単と真実、現実と個性化」というのが、周氏の作品の創作理念ではなかるうか。

3. 周作人散文の芸術風格

散文スタイルの確立により、周作人は現代中国散文史上に大きな名声を博したわけである。だが、彼の散文の輝きは、特に思想性があるわけではなく、鮮明な芸術個性と独特な芸術風格を持ったことにある。だから、読者に親しまれ、心に残される。

その独特な芸術風格には幾つの特徴があるが、先ず、考えられるのは、民俗と草木魚虫鳥獣について書かれた作品が多いということである。民俗民風を書くとき、ほとんどが現実の生活から取材したもので、ポイントは、真実そのうえ素直、わざとらしくふるまうことは、一切なかった。だから周作人の作品は、読者に懐かしい風景を連想させ、心を和ませるという働きがあった。例えば、読者に好評された『故郷的野菜』を例にすると、文章は故郷の辺りのあまり目立たない何種類の山菜について書いてあるだけであるが、けれども、読者に興味を持たせたのは、それらの生活素材のものではなく、故郷への愛情、子供時代の生活風情というような叙情的な文体であった。

「妻が西単市場から料理の材料を買ってきたとき、薺菜が売ってあるのよ、と言ったことにより、わたしは、浙東^⑤のことを思いだす。薺菜は浙東というところの人達が春によく食べる山菜だ。田舎は勿論、例え町であっても、庭さえあればたいいあるので、食べたい時にいつでも取れて、食べることができる。」^⑥

周作人は野菜市場で売ってある山菜を見て、故郷のことを思い出す。春になったら、故郷の婦人と子供達が鉢を手にして、籠を持って、仲間と田野に入って、楽しく歌いながら山菜を探す場面を連想させる。彼は山菜を取るの「一種の面白いゲームをしているような仕事」だと言った。作品に山菜の形状、特長、俗名、学名、用途まで分かりやすく説明するほかに、児童の歌も抜き書いたり、古典を引用したりして、植物学の知識を語ったり、山菜料理の作り方で紹介したりして、作者の生活への豊富な感受と知識、広い見聞を千字ぐらい規

模で、自然に作品に盛り込むことにより読者は伝統的な生活の風情を享受することができた。

もう一つ短編の『烏篷船』という作品も読者に好評を受けていた。これは故郷へ観光に行く予定をしている友人への観光案内の手紙の形になっている作品だった。

「貴方に紹介したいのは、あそこの風土人情ではなく、とても面白い船のことだ。貴方が故郷でいつも人力車、電車、バスに乗っていたが、しかし私の故郷には、それらが全然なかった。出かけるとき、よく船を使う。船を言うと、二種類の船がある。大抵の人が利用するのは烏篷船だった。大きいのは、「四明瓦」と言い、小さいのは、「脚劃船」と言うのだ。

小船は本当に小さく、船底に座ったら、蓬の屋根までの合間は、ただ二、三センチしかなく、両手を左右の船端にかけ、或いは外に出す。このような船に乗っていると、まるで水面に座っているようで、岸に近づく時、岸の地面は乗っている人の目、鼻と一直線になっていて、もし風浪に遭遇される時に、うっかりすると船が引っくり返る可能性もあるので、大変危険だ、しかしとても面白い。それが水郷の特色のひとつだから。もし船に乗って出かけようとするれば、電車と同じようなスピードで速く着くことを期待することはできない。もし町へ行きたいならば、船では二十キロぐらい走らなければ、なかなか着かないので、そのため往復で一日は見込む必要がある。だから、遊覧の気持ちで船に乗り、周りの景色を觀賞すれば良い。いたるところに見られる山、川岸にある烏桕、川辺にある紅タデ、浮き草、漁舎、各種各様の橋。疲れたら、船内で横になって、随筆でも読んだり、お茶でも一杯注いで飲んだりする・・・。」^⑦

作品を読むと、目の前にまるで一枚の真に迫る、趣のある紹興水郷の美しい絵が現れるようで、詩情があふれる楽しい絵を鑑賞しているような気分になる。遠くの山と近くの木、漁舎、橋などが重なり合って趣がある。作者は故郷に特有の烏篷船を描写することにより、紹興という水郷、その兩岸の美しい風景、烏篷船の乗り方、乗る楽しさ、面白さで人々を魅了する。もし行ったことがない人ならば、作品を読んだら、きっとすぐに行きたくなる、そして烏篷船にも乗りたくなる。それこそ、この作品の成功の所以だと思われるところ。

読者は、遊覧者の楽しさを感じながら、さらにこの美しい水郷の絵から、作者の独特の生活体験を通して、自然に表れたある種ののんびり落ち着いた芸術情趣も感受できる。それが周作人の散文芸術の特色だと言えるだろう。

民俗学家でもある周作人は民俗民風を書いた散文は確かに数が多かった。日常生活の中のことを素材にして、人々の切実な共通の感受を描くことによって、読者にも吟味ができるような芸術の美感を感じさせる。ほかに、『蠅』という作品も名作といわれている。人間に嫌われている筈の蠅でさえも大変人情に富む、生活情趣に富むように描かれた。その作品は、詩情と美感にあふれている。

「蠅は可愛くないものである。しかし、われわれが子どものとき、なんとなく蠅が好きだったのだ。夏のとき、私と兄弟は、大人たちが昼寝をしている間、よく甘瓜の皮が捨てられている庭で蠅を捕まえる。蠅は三種類の蠅がいる。飯蠅が小さい、麻蠅には、蛆が出るため、とても汚い、金蠅しかまだ善くない。金蠅はすなわち青蠅で、児童の謎には、頭に赤い帽子を被り、体に紫色のドレスを着るというふうになぞらえられていた。金蠅を捕まえて、薔薇の葉っぱを取ってきて、その針で蠅の背中に刺すと、緑の葉っぱがテーブルの上にゆっくり動いているように見える。もし大きくて強そうな蠅を捕まえたら、はさみでその頭を切ってしまうと、しかし蠅は相変わらず頑張って飛んでいくのだ・・・。」^⑧

周作人は、子ども時代に蠅を遊んだときの情景を生き生きと描写した。作品にはギリシャの蠅が一人の処女から変身したという神話までも紹介されているように、中国、外国の典故やことわざ、民謡などの豊富な資料を引用して、作品を通じて、豊富な科学知識をも適宜に読者に伝えていたのである。作品には蠅に対する憎らしさもたくさん書かれているが、しかし読んだら嫌気がさすことはないかわりに、なんとなく可愛く、面白い

と感じないこともない。なぜかという、作品にはユーモアが含まれており、子ども時代に兄弟と楽しく蠅を遊ぶ情景を描くことにより、現実生活の中から生命力、知識性、おもしろみなどが読むことによって深く感じられる。同時に、周作人の平淡且つ飄逸、洒脱した独特な風格もここによく現れていたと考えられる。

さて、周作人は民俗民風を書くほかに、自分のことを書いた作品も少なくはない。たとえば、読書ノート、日常生活の個人私事などが書かれることが多かった。『雨天の書』に掲載している「喝茶」という短編があった。

「茶道の意味を平凡な言葉で解釈すれば、忙しい中、暇を見つけ出し、辛苦の中に楽しみを見出す営みであると捉えることができる。茶道は日本を象徴するある種の文化であり、また一種の代表的な芸術でもある。・・・お茶を飲むには緑茶を本番だと見ている、紅茶は面白くはない。なぜなら、砂糖を入れたり、牛乳を加えたりするからである。」

この作品はたぶん周作人の淡白な、ゆったりと落ち着いた散文風格を一番よく現した作品だと考えられる。かつて日本で留学した経験がある作者が、生活方式、習慣や情趣に至るまで、日本文化の影響を受けていることが一因にあると言えるかもしれない。お茶を嗜むには瓦屋障子の部屋で、素朴且つ上品な陶磁茶碗を使って、二、三人と一緒に緑茶を飲みながら、優雅な形になっている黄な粉のお茶菓子を食することが最高だというふうに、作品には描かれている。作者の優しくて温かい気持ち、静かで温厚な性格が作品にもよく現れている。このようなのんびりとした作品はほかにも数多く見られる。往事を回想する気持ちを表現したものがあれば、日常生活の中にあまり注目されない、ちいさな事や動作を描写した作品もある。生活の中の細かいことや、自然界の花草樹木、魚虫鳥獣をすべて審美の対象として作品に書き込んだことは、周作人の散文の一大特徴とも言えるかもしれない。

しかしながら、平淡とは言いながら、決して平常、無味という意味ではない。作品を書くことは、読者と心と心との対話だと周作人が思ったから。これこそ彼がずっと追求した一種の散文芸術だと考えられるだろう。

以上の幾つの例から周作人の散文の特色は以下のように分析したい。

- ① 抒情的なものであれ、叙事的なものでもある。その表現方法は、割合平淡であり冷静でありながら、そして蘊蓄に富み、奥深い。
- ② 言葉使いは、大変ユーモア、且つ風刺的。
- ③ 作者が古今中外の知識に対する造詣が深く、それが作品の中にも数多く引用されている。

4. 周作人散文風格の形成

周作人の散文の創作には、必ずそれなりの背景がある。内外的な社会環境、歴史環境、生活環境及び作家の個性などによって作品の風格が形成されると考えられる。

① 周作人は凋落した知識人家庭の子弟で、幼年から知識文化の薫陶を受けて、濃厚なインテリ気質の持ち主になった。研究好きで、向上心が強く、一生涯をかけて、数え切れないほどの作品が書かれていた。作品を通して、読者に残されていたのは、往々にして温和、学者風で、謙虚、かつ静寂を好むというような印象であった。

幼年時代に健康が優れなかったせいで、両親や家族から寛容と愛護を大いに受けたことによって、従順性がある、いわゆる良い性格の人間に育てられた。一方、あの時代だから余儀なく中国の古い伝統的な封建思想、

封建文化の教育も受けた。

② 当時、富国強民という社会理想を持って、故郷を離れ、南京にある海軍学校に入ったことにより、環境が一変された。そのときから周作人は、むさぼるように外国の先進的な科学技術、進歩的な文化知識、外国語などを勉強し始めた。そのあと、また日本へ留学の道を歩んだ。日本にいる間に、勉強のほかに、たくさんの日本の著名な文学者と出会い、文学活動にも意欲的に参加したことによって、視野が広がり、新しい知識、新しい思想、考え方を身に付けた。そして積極的に中国の封建思想、封建文化に対して、批判することに取り組んだ。

③ 彼は若いときから、中国の書籍、外国の書籍、自然科学と社会科学の多分野の書籍を読むのが好きだった。中でも読書ノートやエッセイなどを好み、特に明朝の末期と清時代の書物をたくさん読んだ。それと同時に自分も数多くの読書ノートを書いた。

現代散文が現れたことについては、周作人はかつて、こう分析した。

「新しい散文の発達と成功ができたことには、二つの要素がある。一つは、外側からの応援があり、もう一つは、内側からの内応があったためである。外側からの応援というと、つまり西洋からの科学哲学と文学上の新しい思想の影響を受けたことを指す。内応というと、つまり歴史の言志派文芸活動への復興のことを指す。もし、このような基礎がなければ、容易には広まらない筈だったかもしれない。もし外来の新しい思想の影響がなければ、例え成功したとしても、新しいものが充填されなければ、なかなか存続し続けることもできないかもしれない。」^⑨

ところで、周作人の散文風格の形成には彼を取り巻く外的な環境の影響も受けていたことが確かなことだった。

④ 五・四新文化の時期は外国の自由民主の新思想の影響を受けて、今まで影響力の強かった保守主義、封建思想に取って代わるような、比較的に自由と寛容とゆとりのある雰囲気の中、当時の中国は、文学の領域、道德観念、人々の生活方式などもそれに従って、大きな変化が見られた。

周作人の作品は幅広い素材を扱い、中国、外国のものことや、古人、先人、同輩、人間世界、自然世界、動物世界など、それらを全部作品の資料になり、作品の内容として使われた。それこそ、周作人の度量の広さ、達見、人情に善くわきまえたことの現われだろう。

⑤ 一方、周作人が、内面に大変寂しさも抱えていたといわざるを得ない。彼はよく有島武郎の言葉を引用して、自分の寂しさを以下のように表している。^⑩

「寂しいから、創作をする。……

愛するから、創作をする。……

愛を得るために、創作をするから。……

また、自分の生活を鞭撻するために創作をするから。」

周作人は、また『自分の園地・旧序』にこう書いた。

「寂しいから、文学に慰めを求める、そして読書する、文章を書く。普段、友人とお話するのが好きなので、今も想像の中の友人を捜し求めるように、私のつまらない閑談を聞いてもらいたいのだ。昔から抱いていたばら色の夢がすべてまぼろしと、はっきり分かっているのに、それでもまた求め探し続けている。」

そして、『瓜豆集・結縁豆』にこう書いた。

「人間は群れを成すのを好むが、往々にして人群れの中にも、耐えられない寂しさを感じる時もある。

縁日のときに人混みの中にも、自分はまるで一枚の落ち葉のようで、縁がすべて切れて孤立しているかのように感じられる。文章を書くことは、寂しさに耐え切れないからである。どんなに難しく書いても、読んでくれる読者がいてほしい。もしかしたら、これがたぶん芸術の力かもしれない。私はただ人と近づきたいだけだった。」

周作人の散文を読んで、印象に残ったのは、作者の本当の気持ち、心情が飾り立てることなく語られているということであり、そして書いた作品の大半が庶民の日常生活と密接な関連があること、或いは彼自身の身の回りのこと、またお茶や酒などについての談論、引用された「古今中外」^⑩の伝説などのことだった。作品の創作を通して、彼は心の中の寂しさを紛らし、思い出のことへの追憶、故郷への懐かしく思うことを散文という芸術の形式に託しているのである。

5. 結論

周作人は『永日集・桃園』にこう書いている。「頭が散文的、唯物的であり、詩的ではない」。また『立春之前・明治文学之追憶』に「正直に言うと、私はあまり小説が好きではないもので、たぶん分からないから、好きではなかったかもしれない。よく知らないけれど、たいてい小説を文章として読んでいるのだ。小説らしくなく、エッセイらしい小説に対しては、かえって大変面白いと思うが、それと違って、構造があり、波がある、まるでアメリカ版の小説により創作された作品に対しては、あまり読む気が起こらないのだ」と書いた。

中年になった周作人は一筋の自分の「随筆」散文を書くことに専念した。確かに、彼の生活方式、情趣、気質、人生の哲学、物事に対する考え方、思考方法は彼が書いた作品とぴったり符合している。彼の作品の中から、彼の影を見出すことができる。彼は、ずっと「散文」という文学形式を自分の一種の芸術だと見なしていた。なので、周作人の書いた作品は簡潔、閑適であり、そして知識性、趣味の色彩が強い、これこそ、まさに周作人の独特な散文形式の基本的な特徴だと言えるだろう。

彼の作品を読むことによって、読者は、いろいろな知識と趣味が豊富になることができるばかりではなく、精神上のリラックスと楽しみも得ることができるのは間違いがない。

(注)

- ① 晨报副刊（中国五・四新文化の時期に創刊）
- ② 『周作人早期散文選』「美文」 p 269～270
- ③ 『周作人早期散文選』「美文」 p 269
- ④ 李素伯『周作人の小品文』見陶明志編『周作人論』 p 84～85. 上海書店
- ⑤ 「浙東」は中国の浙江省の東部地区をさす
- ⑥ 『自己的園地・雨天的書』「故郷の野菜」 p 249～251
- ⑦ 『周作人早期散文選』「烏蓬船」 p 237～239
- ⑧ 『自己的園地・雨天的書』「蠅」 p 257～260
- ⑨ 当代散文創作個性精神的式微與復帰 p 1
- ⑩ 『談龍集・有島武郎』 p 27
- ⑪ 「古今中外」は、古代、現代、中国、外国という意味

参考資料

1989年周作人『談龍集』 岳麓書社印行

- 1989年周作人『談虎集』 岳麓書社印行
1988年周作人『自己の園地、雨天の書』 人民文学出版社
1984年周作人早期散文集 上海文芸出版社
1986年周作人『知堂書話』上 岳麓書社印行
1986年周作人『知堂書話』下 岳麓書社印行
1986年李景彬『周作人評析』 陝西人民出版社
1996年袁良駿『現代散文的勁旅』 陝西人民教育出版社
1991年錢理群『周作人論』 上海人民出版社